

速いダンゴムシと遅いダンゴムシ 柏みどり幼稚園（千葉県柏市）

【3歳児】

ダンゴムシ探しをしている子どもたちは、当初ダンゴムシとワラジムシは同じ虫だと思いながら袋に集めていた。5月に入って、子どもたちは捕まえようとした時の逃げるスピードの違いやスピードの差に気付いて「うわっ、これ速い(ワラジムシのこと)」「ゆっくりのいるね～(ダンゴムシのこと)」「これゆっくりだ」「ゆっくりのちょうだい」というやりとりをするようになった。この時はまだ、<丸くなる・丸くならない>ということまでは気付いていないようで、速いダンゴムシと遅いダンゴムシがいると思ったようだ。この子どもの気付きをクラスの話題として膨らませていきたい。

【こっちは速い、こっちは遅い】（ダンゴムシとワラジムシとを比べてみよう）

保育者はケースを2つ用意し、「こっちは速い、こっちは遅い」と言う子どもたちと一緒に、速いダンゴムシと遅いダンゴムシを分けながら集めていった。1ケースに30匹位が集まりクラスで観察してみる。2つのケースを見比べる。「色が違う。こっちは寝てるけど(丸くなっている)、こっちは寝てないよ」「うん、寝てる」「こっちは大きい(ダンゴムシ)、こっちは小さい(ワラジムシ)」「転んでいるのいるね」「こっちは速いね」「こっちは触るとグルグルってなるんだよね」という子どもたちの言葉から、違いに気付いていることがよく分かる。

保育者がケースを揺らす。逃げようとするスピードも全く違って、「速い速い」と言って見ている子どもがいる。保育者が「でもこのダンゴムシ丸くならないけど...」と言うと、「こうやってやれば?」とむりやり丸くさせようとする子どもがいる。保育者が「こっちの丸くならない虫知ってる?」と聞くと、知っている子が「ワラジムシ」と答える。姿が似ていることから「仲間なんだね」と言う子もいる。

保育者が「遅くて丸くなるのがダンゴムシ、速くて丸くならないのがワラジムシっていうんだよ」と話す。

比べて見ることで、姿は似ているけど違う虫がいるということが分かったり、<速い・遅い>から、<丸くなる・丸くならない>に意識を向けて虫探しをしたりする姿が見られるようになる。ワラジムシの存在を知ってからもしばらくは区別できなかった子が、微妙に色が違ったりすることに気付くなど、経験と感覚で見分けられるようになっていく。



【ダンゴムシは葉っぱよりもお花が好き】（ダンゴムシは何を食べる?）

保育者が「ダンゴムシって何を食べるのかな?」と言うと、子どもたちは「お花」「葉っぱ」「甘いミカン?」「おにぎり?」と、自分の生活と結びつけながら想像を膨らませて言う。ケースの中にパンジー、葉っぱ、さくらんぼ、ゼリーを入れて観察する。しばらくすると花の上にダンゴムシがのっているのを見つけた子どもが「お花食べてる」と言う。さくらんぼに近づく様子を見た子どもたちは「食べそう」と言う。保育者が「私だったらゼリーがいいな～」という、「ぼくも～」という子どもがいる。

次の日、「ゼリー食べてないね」「あっ、お花ない」と、子どもたちが食べ具合を確かめるやりとりをする。

パンジーの花びらは1日で跡形もなく、無くなっていった。花が無くなってしまったからか、1匹はゼリーに頭を突っ込んでいて、見ている子どもが「ゼリーも食べてる」と言う。

子どもたちと食べ具合を見ていく中では、**ダンゴムシは圧倒的にパンジーの食べ具合がよいことに気付く**。子どもたちの中では、「ダンゴムシは葉っぱよりもお花が好き」ということになる。

その後、ダンゴムシを見つけて家に持ち帰った子がいる。家で小学生の兄が「(エサとして)葉っぱを入れない」と言う、「違うよ。ダンゴムシはお花食べるんだよ～」と言ったらしい。幼稚園での体験が生きた言葉だと思った。



みどころ

3歳児にとって、ダンゴムシが身近な虫になっていることが分かります。保育者はダンゴムシとかかわる子どもの様子や言葉を丁寧に見取り、「こっちは速い、こっちは遅い」と気付いて興味をもった言葉に着目して、援助を工夫しています。違いに気付いていることを受け止めて別々に集めたり、ケースを揺らしたりする中で、子どもたちはより興味深く観るようになり、自分たちの気付いたことを意識する経験に結びつきました。関心をもってよく見る中で、何を食べるのか観ていて気付き、「葉っぱよりも花が好き」とみんなで納得したことは、「科学する心」の育ちが見える3歳児なりの発見です。